

学生のコメントより

社会科教育講座・駕原 進

大学院教育学研究科教科教育専攻社会科教育専修における社会科教育特論Ⅱ演習（前学期）と社会科教育特論Ⅱ（後学期）を一連のものと位置付け実施した。学生は、社会科教育特論Ⅰ（前学期）・社会科教育特論Ⅰ演習（後学期）をふくめた4科目8単位の中から4単位取得が修了要件となっている。本2科目とも、履修登録者は3人、コメント回答者は3人、単位認定をした者は3人であった。

社会科教育特論Ⅱ演習と社会科教育特論Ⅱの目的は、次のようである。

社会科教育特論Ⅱ演習（前学期）：社会科教育実践上の諸決定の根拠となる授業理論の考察を通して、社会科学学習論研究方法の習得を図る。「優れた授業」の分析と説明の演習を行う。

社会科教育特論Ⅱ（後学期）：諸国の社会科教育を素材にして社会科教育の理論的・実践的課題を考察するとともに、社会科教育研究に必要な基礎理論や授業理論の考察、近年の社会科教育研究について理解する。

両目的を達成するため、社会科教育，特に公民教育に関する入門的なテキストである社会認識教育学会編『改訂新版 公民科教育』学術図書出版を分担して報告し，院生同士，あるいは教員を交えて議論する形式で1年間進めた。また，11月27日（火）には，社会科教育特論Ⅱを公開し，カンファランスをしていただいた。約1時間カンファランスにおいては，

- ①院生の学びと教員の指導に関する議論
 - ②問いのたてかたの問題
 - ③ディプロマポリシーと講義に関する議論等について意見交換を行うことができた。
- 非常に有意義な時間であった。

以下は履修者のコメントである。

本授業を受けての1番の反省点は、公開授業後にも言われたことではあるが、予習が至っていなかったということである。本授業では毎回、代表者がレジュメを作成してくるのであるが、そのレジュメも教科書の本文を切り貼りしており、本文の内容の理解にまでは至っていなかった。最低限、教科書に登場している専門用語をはじめ、専門知識についてしっかり予習をしていれば、何倍もよい話し合い・討論ができたのではないかと思うと残念である。そのせいか、本授業では、与えられた質問に答えるだけ、または与えられた質問にすら答えられないといったケースもよくあった。これでは大学院の授業として成立しない。以後、このようなことのないように心がけたいと思う。

本授業の良かった点は、公民科教育の歴史から始まり、内容構成、問題点、具体的な指導案の検討、評価論と、公民科教育における幅広い授業内容であったということである。特に評価論においては学部の授業で触れた経験が無く、自分自身はかなり成長できたのではないかと感じているとともに、評価方法を知らないまま教師になっていたかもしれないという自分自身への恐怖感にかられた。これは直接、本授業に関係することではないが、学部の授業でも評価についての授業を取り入れるべきではないかと感じた。また、具体的な指導案の検討においては、厳しいご指摘も受けたが、自分なりに授業をしっかりと考える、また、自分なりの意見をぶつける機会が多く持てて良かったと思う。これまで指導案には多く触れてきたわけであるが、ここまで深く1つの指導案を検討したことはなかったのではないかと思う。

本授業の改善してほしい点は、まず、他

の授業との連携についてである。公民科で言えば今学期は「社会学特論演習」「経済学特論演習」「政治学特論演習」「哲学特論演習」と4つの授業があった。それらの授業と連携し、指導案の作成などを行えばより良い授業になったのではないかと思う。次に、先生の毒舌についてである。普段の毒舌は愛の鞭として受け入れられるのであるが、投げ捨てるように授業を終わるのは良くないのではなかろうか。確かに我々の予習・学力が至らず先生を怒らせてしまう部分は多々あったが、大切なことを吐き捨てるように言って授業を終了されては辛い。

先生の授業、非常にためになりました。この授業を通して自分自身の考え方を深めていきたいと思えます。ありがとうございました。

(以上院生A)

報告は、書いていることをまとめるだけではなく、自分の言葉で説明できるようにすることが、重要でそれが理解したことになるということが理解できた。

報告に対する質問を繰り返すことで、その報告の本質を学生が見つけられるよう導いてくれた。答えられなかったら勉強不足であることに気がつくことができた。自分が予習不足のとき議論に参加できなかった。先生はいつも悩みを抱えているようであった。次はかんばろうと思えた。

(以上院生B)

一年を通して高校公民科設置の過程、意義、意味について考えることができた。

テキストは高校公民科についての内容だったが、高校での教育がそれ以前の学校教育とどのように連携しており、どのような位置づけにあるかについて考えることができた。

自分たちが問いを持つことで、講義の内容が深まることを実感できた。文面を素直に受け止めるのではなく、常に批判するつもりで読み込まなければならないことを理解できた。テキストを読み込むには自分には知識や読書量が不足していることを痛感

した。

小学校社会科、生活科、中学校社会科での公民的分野、また、高校公民科という教科は、他の社会科の分野と比較すると児童・生徒たちが学校教育を終え実社会に出たときに、直接的に糧となる部分が多く含まれている。それは社会のルールや規範に始まり、選挙制度や訴訟、契約など、具体的な場面にも現れてくることから考えられる。公民科教育ではそのような実社会での実生活に対応できる児童・生徒を育成していくことも役割のひとつと言えるが、これらの内容は一般に子どもたち自身との直接的な関係が見られないため教授し難い。そのための直接的な関係に着目した教授から視点を変えた教授の方法や、指導方法、実際に子どもたちに実践させる思考方法について考えることができた。

(以上院生C)